

紀 要

第 9 号

1 9 9 6 . 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

目 次

序

‘廃棄’を考える－貝塚出土資料の検討にあたっての試論－〔鈴木康二〕	1
粟津湖底遺跡第3貝塚の貝類採取活動－セタシジミの成長速度と年齢構成－〔稲葉正子〕	11
大津市粟津湖底遺跡出土の錘〔瀬口眞司〕	16
篋状木製品の用途について〔松澤 修〕	25
縄文晩期土器棺墓の調査方法について－近畿地方の場合－〔中村健二〕	38
近江における弥生社会の理解にむけて－その方法と課題－〔大崎康文〕	42
長浜市域における弥生時代の石器－今川東遺跡出土石器を中心に－〔稲葉隆宣〕	51
石組みの煙道を持つカマド－古代の暖房施設試論－〔上垣幸徳・松室孝樹〕	57
集落遺跡出土の鉄製品についての研究ノート〔田井中洋介〕	79
近江へのアプローチ・その3－野洲・栗太をフィールドに－〔近江歴史クラブ〕	85
1. 野洲川流域の前・中期古墳について〔鈴木桃代〕	89
2. 栗太・野洲における後期古墳の類型的把握 －古墳時代システム論への墓制的アプローチ－〔細川修平〕	94
3. 集落遺跡から見た古墳時代の特質－古墳時代システム論への予察－〔細川修平〕	102
4. 栗太・野洲郡における掘立柱建物データの抽出と分類〔神保忠宏〕	110
5. 近江国の古代駅路と官衙遺跡について〔内田保之〕	122
6. 古代における琵琶湖の湖上交通についての予察〔畑中英二〕	130
7. 田原道をめぐる二つの地域〔重岡 卓〕	136
8. 近江における玉造りをめぐって〔中村智孝〕	149
9. 栗太・野洲郡における古代の土器様相〔畑中英二〕	157
10. 鉄鉱石の採掘地と製鉄遺跡の関係についての試論 －滋賀県の事例を中心に－〔大道和人〕	164
栗太・野洲郡のまとめ	179
大津北郊白鳳寺院の造営計画（その1）〔仲川 靖〕	185
古代遺跡と出土文字資料〔濱 修〕	200
石山国分遺跡出土瓦の覚書〔平井美典〕	208
巡礼者の宿－鴨田遺跡出土の巡礼札より－〔重田 勉〕	215
焼物二話〔稲垣正宏〕	220
蒲生稲寸氏について－近江古代豪族ノート5－〔大橋信弥〕	224
律令神話に於ける農業神について〔造酒 豊〕	233

日本古代の対外関係史の一様相

－日本古代史研究ノートあるいは覚書その2－〔芝池信幸〕	238
遺跡の撮影〔阿刀弘史〕	243
新聞報道にみる文化財保護25年－新聞記事データベースの作成と利用－〔中川正人〕	252

田原道をめぐる二つの地域

重 岡 卓

1. はじめに

田上盆地内で唯一確認できる古代寺院・石居麿寺は、金堂基壇跡が現存し、また、出土した軒丸瓦が近江では他に類のないものであることから、注目を集めてきた(文献1・2・3・4・5)。その瓦の来歴をたどるために、軒丸瓦の文様構成が類似しているとされる綴喜郡宇治田原町の山瀧麿寺出土資料と比較検討してみたい⁽¹⁾。宇治田原町域は、大津市田上と田原道でつながる南隣にあたる⁽²⁾。両寺院とも本格的な発掘調査が行なわれたことはなく、表採資料によってその性格を伺い知ることしかできないが、ここでは予察として両寺院の性格を推測し、田上と宇治田原という二つの地域が置かれた歴史的状況を考えてみたい。

田原道は東山道の一部とも言われ、東国・北陸と大和を結ぶ交通路が交錯する近江の主要交通路の一つである。田原道の出現以前は、山科を通る後の東山道ルートが重視されてたことが明らかにされている。新たに深い山中に道を築いた意図を推察してみたい。

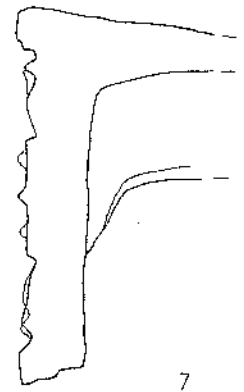
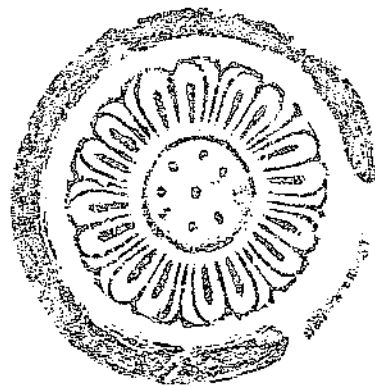
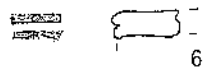
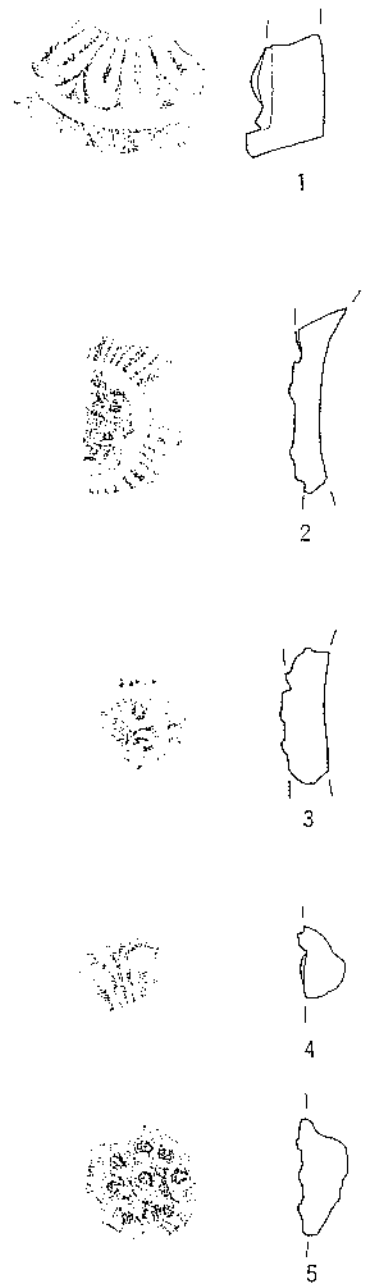
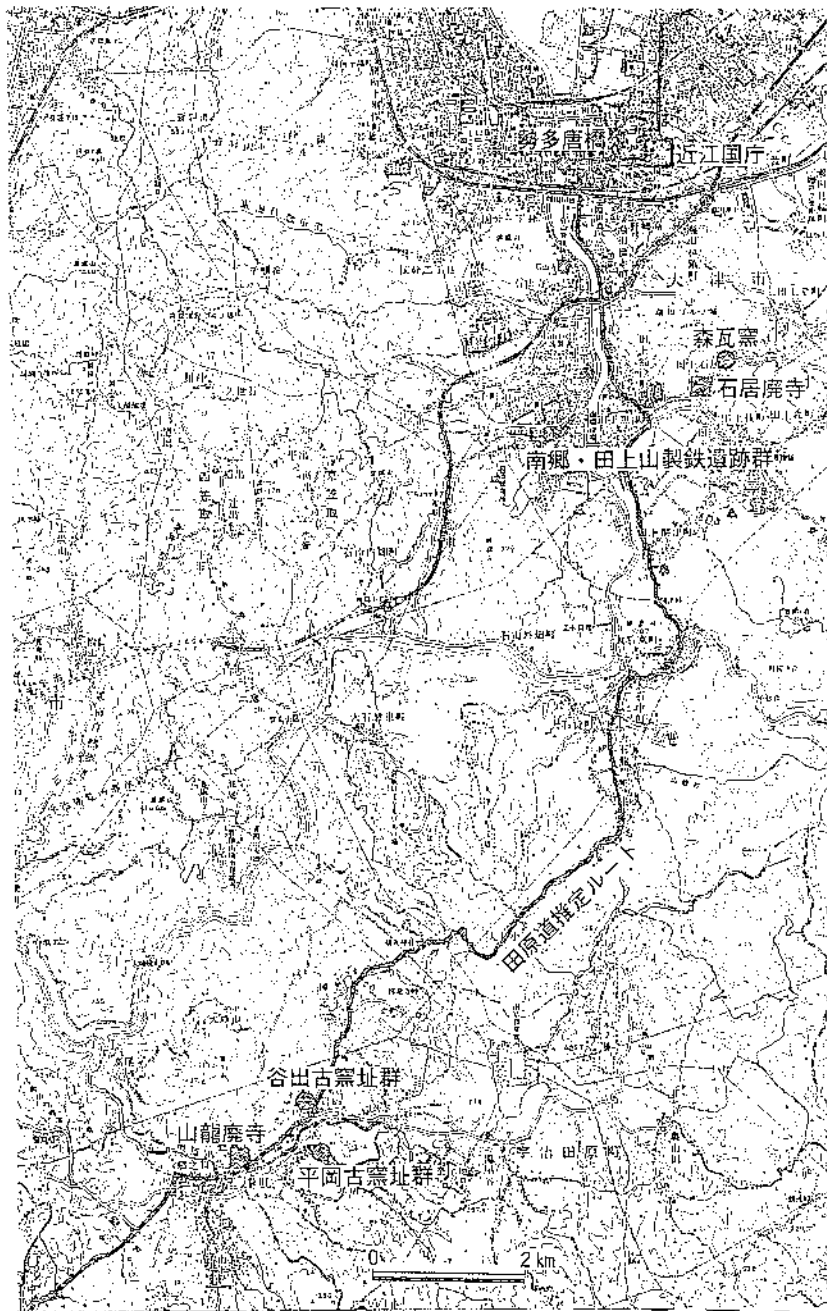
2. 石居麿寺と森瓦窯

石居麿寺には滋賀県大津市石居町に金堂跡と考えられる基壇と礎石群が現存している。これまでに現存基壇の性格についての検討や、出土資料の紹介が行なわれている。

(石居麿寺の立地) 大津市田上地区は、瀬田川に流れ込む大戸川の下流に広がる小盆地である。古墳時代以前の集落の様相はまだよくわかっていないが、盆地内での古墳の分布は南半部の田上里・枝町周辺と東半部の上田上町付近に偏在している。また、年代は不明であるが、製鉄遺跡群も盆地南半の山際に集中して立地している。これに対し、盆地の北西端部にある石居麿寺周辺には前段階の遺跡がほとんど見出せず、石居麿寺の立地の特異性が伺える。

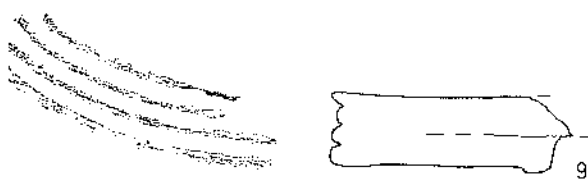
(石居麿寺出土資料の概要) 石居麿寺では現在、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、塑像、泥塔の出土が知られている⁽³⁾。

軒丸瓦は1形式2種が見つかっている。いずれも素縁文複弁八葉軒丸瓦であるが、蓮子と間弁の表現で2種類に分類できる。A種はかすかに圏線を持つ蓮子を1+8に配し、長くのびて界線化した間弁を持つものに対してB種はシャープな圏線を持つ蓮子を1+6に配し、弁端部に楔型の間弁をおくものである⁽⁴⁾。A類は圏線のないものもあるが、蓮子配置から同范関係が確認できることから、それは范の傷みによるものである。注目されるのは、A類とB類が大きさや文様構成だけでなく、その製作技法がまったく異なるといえよう。A類は薄く作った瓦頭を少ない粘土で高い位置にナデて接合し、瓦頭裏面をナデて成形する。外縁部に粘土充填痕が残るなど、全体に雑な作りである。B類は、接合部は不明であるが、瓦頭部は粘土板を重ねて厚く作り、瓦頭裏面を丁寧にケズリ、全体に丁寧な作りである。

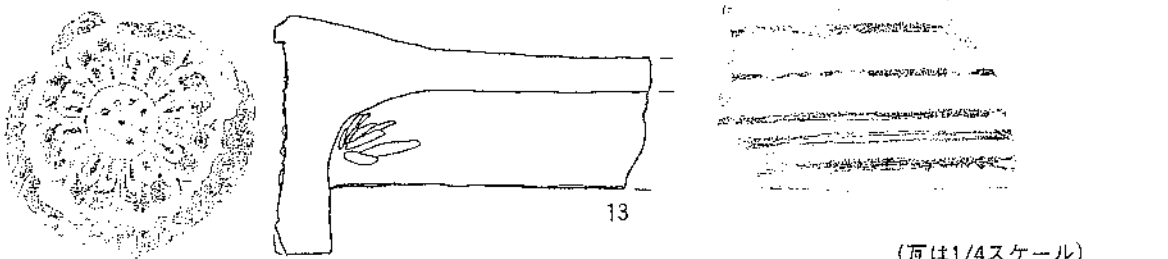
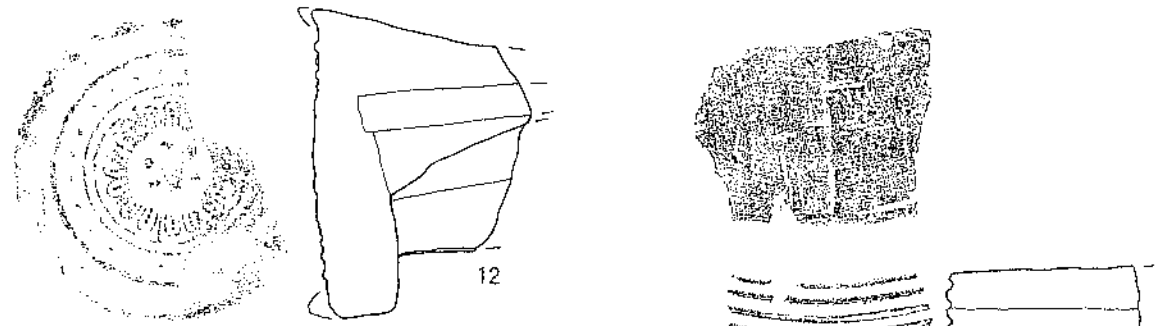
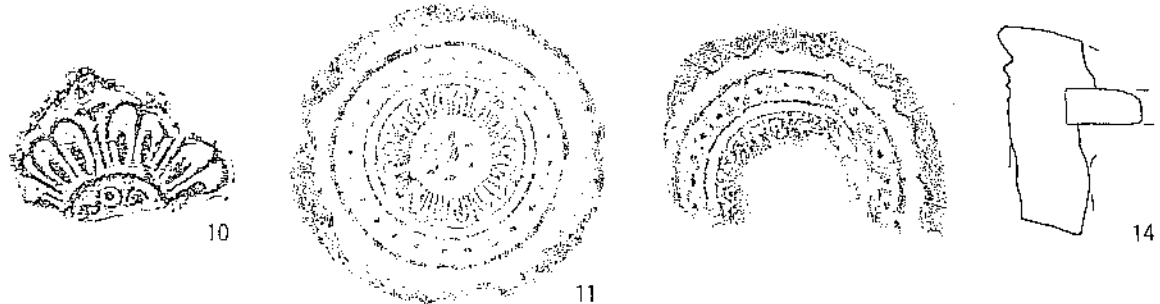


(瓦は1/4スケール)

第16図 遺跡位置図・石居廃寺出土軒瓦実測図



森1号窯



(瓦は1/4スケール)

第17図 森1号窯・山瀧廃寺出土軒瓦実測図
山瀧廃寺 (10は文献12から、11~13は文献13から転載)

軒平瓦は段顎の彫りの深い3あるいは4重弧文のもので顎部下面には施文していない。施文工具の違いから沈線断面がV字状のものとU字状のものがある。いずれも凸面は丁寧にすり消しを行ない、凹面には細かい布目を残すものと縦に擦り消すものがある。全体に丁寧な作りである。

丸瓦は、凸面-凹面の順で平行タタキ-ナデ・ケズリ消し、斜格子タタキ-布目のまま、縄タタキナデ消し-布目のまま、縄タタキ-布目のままの四グループに分かれる。

平瓦は、平行タタキ、格子タタキ、縄タタキ、凸面をナデ消して凹面をケズリを施す四グループが確認できるが、丸瓦との対応関係は不明である。

いずれの瓦も胎上に少量の金雲母・雲母、多量の長石、砂粒を含むものであった。

以上見て来たように、石居廃寺出土瓦は、軒丸瓦からは大きく二つのグループに分かれる可能性が考えられたが、これは大きな時期差を示すよりも生産集団の系譜を示す可能性を指摘しておきたい。ここでは、軒丸瓦という視点からは石居廃寺の造営は、従来の見解通り7世紀後葉の一時期のものであるといえよう。

(森瓦窯について) かつて向畑瓦窯と呼ばれていた窯跡で、瓦が大量に出土したといわれる天狗谷瓦窯と合わせて森瓦窯と呼ぶ。石居廃寺の東隣で道路工事に際して1基の登り窯が見つかり、瓦や須恵器が採集された(文献6)。周辺にも数基の窯があるとされるが、現状では確認できない。⁽⁵⁾ここでは資料が採集された窯跡を森1号窯としておく。瓦は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦が採集されている⁽⁶⁾(図2・表2)。軒丸瓦は石居廃寺出土A類と同範で、成形技法・胎土も同じである。丸瓦は3種、平瓦が2種確認でき、いずれも石居廃寺出土資料の一部と対応する。森1号窯が石居廃寺に瓦を供給したことは間違いないが、現資料では他にも石居廃寺に瓦を供給した窯の存在が想定できる。しかし、森1号窯で出土した資料は石居廃寺で確認できた資料の中で、古い様相を示しており、森1号窯が石居廃寺創建に関わる窯であることはほぼ間違いない。

3. 山瀧廃寺

山瀧廃寺は京都府綴喜郡宇治田原町荒木に所在し、近年まで堂宇が残っていた。現在、公民館や民家が立ち並んでいる。また、鎌倉時代の懸仏が現存している。

(山瀧廃寺の立地) 田原川が諸河川を集める小盆地の中央部北側、大峰山を背にした台地上に位置する。宇治田原町域は狭い河谷平野が丘陵に張り付くように入り込み、その河谷平野も起伏があって、古代寺院設立の前提となるような大規模な水田を形成する余地は見出しにくい。現在、宇治田原町内では寺院設立の前段階の遺跡は見つかっておらず、寺院設立が地域開発の契機になっている可能性が高い。

(山瀧廃寺出土遺物の概要) 山瀧廃寺からは現在数種の軒丸瓦と2個の軒平瓦、平瓦が採集されているが、現在所在不明の資料が多い(文献8・9・10・11・12)。ここでは現存する資料や拓影の残る資料について見てみたい。⁽⁷⁾

軒丸瓦は単弁2種、複弁2種が出土している。山瀧廃寺創建瓦とされるのは山田寺式軒丸瓦で、子葉部分の破片が写真で残される。軒丸瓦10は外区に線鋸歯文をもつ複弁八葉のものである。大きい中房に鬚線を持つ蓮子を配し、長い間弁が子葉とつながり界線化している。拓影からの推定

で、直径約20cm、蓮子は1+8である。この瓦は、高麗寺出土軒丸瓦KMM23式と、文様構成、とくに花卉と間弁の表現が類似している。13は新羅の影響が見られる華やかなもので、作もすぐれ、文様構成もしっかりしたものである。拓影のみ現存している。11・12・14は平城宮6282式の軒丸瓦で、中房は大きな蓮子を中心に周囲に6個の蓮子を配し、花卉の外周を線で表現し、中葉も平面的に表現している。内区と外区を断面が台形を呈する2重の凸線で画している。内側の線はやや鈍いが、外側の線は彫りも深くシャープである。外縁内区は珠点、外縁外区は線鋸歯文が配される。瓦頭は厚く、多くの粘土を使い丁寧なナデで低い位置に接合される。14は丸瓦内面に布目をそのまま残すが、外面は縦方向の丁寧なナデが施される。瓦頭裏面はケズリが丁寧に施され、丸瓦が右に偏って接合されている。表面は黒色・内部は黒灰色を呈し、軟質で、胎土に砂粒と雲母を含む。

軒平瓦は四重弧と三重弧のものがある。いずれも山田寺式あるいは川原寺式軒丸瓦に対応する。15は沈線の断面が開きぎみのU字状を呈する4重弧のもので、顎部下面に断面がかまほこ型から山型を呈する突帯を6本丁寧にナデで接合している。上面は丁寧なナデが施され、青灰色を呈し、緻密で堅固である。段顎を持つ三重弧軒平瓦で、沈線の断面がゆるい逆台形を呈し、顎部下面に格子タタキが残る資料も紹介されている。

丸瓦は小片が1点見つかっている。凹面の布目を縦方向に荒くナデ消し、凸面の縄タタキが残るものである。青灰色を呈し、緻密な胎土で固く焼きあげられている。

平瓦は片面に格子タタキが4つ配されたものである。

以上見て来たように、山瀧廃寺の瓦は、時期差を持った大きく2つのグループに分かれる。川原寺式軒丸瓦を主とするものと、平城宮6282形式を主とする段階である。今後の資料の増加によっては、山田寺式軒丸瓦や新羅系の軒丸瓦が主となる段階の設定も必要になって来るかもしれない。現状では、平城宮6282形式を主とする段階で、伽藍の拡張などの変革があったとみるべきであろう。その内容を伺い知ることはできないが、ここでは再整備という言葉にまとめておく。

(谷出窯址群について) 山瀧廃寺の瓦生産地は、現在まだ確認されるに到っていないが、山瀧廃寺の東側に位置する谷出窯址群の中に瓦窯が存在する可能性が高い。ただし、これは平窯と思われ、平城6282形式軒丸瓦に関するものであろう。

4. 石居廃寺と山瀧廃寺

軒丸瓦の文様構成の類似のみが指摘されて来た両寺院であるが、ここで類似点と相違点を整理してみたい。

(類似点) 第一に立地条件が挙げられる。ともに田原道に隣接し、寺院設立前段階の遺跡が周囲に見られないことも共通している。第二に、軒丸瓦の文様である。石居廃寺出土軒丸瓦A類と、山瀧廃寺出土複弁八葉軒丸瓦は、外縁が異なるものの、中房や花卉、特殊な間弁の表現が共通し、全体の雰囲気似通っている。これは、高麗寺KMM23式軒丸瓦の花卉と間弁の表現に非常に似ている(文獻15)。KMM23式軒丸瓦が面違鋸歯文の外縁をもち、形式的に先行するが、他

に類をみない間弁の表現に注目すれば、両寺院の軒丸瓦文様の祖系を高麗寺に求められるかもしれない。⁽⁹⁾

(相違点) 第一に、創建瓦の違いが挙げられる。山瀧廃寺が山田寺式軒丸瓦をもつのに対し、石居廃寺は複弁八葉軒丸瓦を創建瓦とする。しかし、この違いは山瀧廃寺出土の軒丸瓦に対する評価が定まらない現状では、資料数の増加とともに見直す必要が生じるかもしれない。両寺院の設立時期については、大きな時期差はないとする方が自然であろう。第二に、軒平瓦に関する点が挙げられる。山瀧廃寺出土資料は、顎下面に装飾を施すのに対して石居廃寺出土資料には顎下面に装飾を持つものは確認されていない。南山城地域には、軒平瓦顎部下面に装飾を施す例が多く見られるのに対し、近江ではほとんど見られない。この相違は、両寺院間にとどまらず、2つの地域の個性に起因するのかもしれない。第三に、川原寺式軒丸瓦以外の軒丸瓦についてである。山瀧廃寺で見ついている軒丸瓦の大半が平城宮6282式にあたることは注目される。これは、設立時の相違というよりは、その後の両寺院のたどった道の違いといえよう。

(不明点) 丸瓦と平瓦については、資料数が少なすぎることもあってか、現時点では類似点が見出せず、今後の検討課題というほかはない。

軒丸瓦という視点からみた時、両寺院には全体として、相違点もあるものの、強い類似点が見出せたと言える。

(石居廃寺と山瀧廃寺から見た近江と山城の関係について) ここで、石居廃寺と山瀧廃寺の関係を着目して3つの段階を設定したい。第一段階は、両寺院が設立される段階である。これは、7世紀後葉におくことができる。第二段階として、山瀧廃寺の瓦に見る空白期である。この時期は、視点を広げてみると、恭仁宮や紫香宮の造営が相次ぎ、山城南部-甲賀ルートが注目を集める時期にあたっている。田原道ルートよりも甲賀ルートが強調される時期であり、一つの段階として設定しておきたい。これは、8世紀前半と考えられる。第三段階として山瀧廃寺が再整備される段階である。これは、平城宮6282式の出現時期から8世紀後半以降におくことができる。

第一段階 前述のように、両寺院は田原道に沿った場所に建てられている。前段階の遺跡が見られないことから、設立場所はこの交通路を意識して選ばれている。ここで田原道についてみよう。田原道は長岡京に都が移るまで東山道の一部とも考えられている。恵美押勝の乱に際しては、追撃部隊が田原道を通って先回りしている。東山道を含む七道の整備は、7世紀末には既に行なわれたと考えられており、両寺院設立時期には田原道は存在した。田原道の整備が山瀧廃寺設立から宇治田原町域の「開発」⁽¹⁰⁾の契機ともなり、石居廃寺設立の契機となったと言える。田原道の整備が宇治田原・田上両地域の「開発」を視野に入れて行なわれた可能性も考えられる。また、軒丸瓦からみる限り、同じく東山道に接した高麗寺を中心とする南山城地域との強い関係もこの時期の大きな特色である。

第二段階 この段階の大きな特徴は、聖武天皇による恭仁宮と、それにつづく紫香樂宮の造営である。遷都に伴って、恭仁宮・紫香樂宮への恭仁京KM05同範軒丸瓦の流れが見られる(文献16)。この流れは、近江の他の地域には展開を見せない。これは、遷都に伴う交通路の変化に

起因する可能性が高い。この点については後述する。

第三段階 山瀧廃寺において平城宮6282式の瓦が出現する段階である。この段階には、宇治田原町域に平岡古窯址群と谷出古窯址群が出現している（文献7・13）。両古窯址群とも東山道に近い丘陵部に造られており、交通路を意識したものと言える。交通路の再整備に伴って、宇治田原地域に新たな手工業生産が展開していく様相が見えてくる。一方、田上においては、石居廃寺に大きく手が加えられた形跡は見出せない。盆地南縁部に展開する製鉄遺跡群がこの時期のものと考えられることから、宇治田原とは違った地域の有り様を示している。

5. 南山城と近江における藤原宮系と平城宮系の軒丸瓦の分布について

最後に、南山城と近江における藤原宮軒丸瓦と平城宮軒丸瓦について概観してみる。

（南山城における藤原宮系・平城宮系の分布） 南山城において藤原宮系軒丸瓦の分布する地点は限られている。南山城においては、川原寺式軒丸瓦がほぼ郡単位で系譜がたどれ、それぞれのグループが瓦の再生産を行ない得たことが指摘されている（文献15・21）。綴喜郡の各寺院は、それぞれ独自の軒丸瓦を採用しているが、山瀧廃寺は高麗寺の系譜につながるのには先にみたとおりである。先学が指摘するように、南山城の中に、独立して再生産を行ないながらそれぞれ独自の瓦の系譜を持つ、言わば「伝統的」なグループが展開していたと言える。山瀧廃寺もこの「伝統的」グループの一部をなしているのである。

また、南山城ではほとんどの古代寺院において平城宮系の瓦が出土している。特に平城宮6282系軒丸瓦は、分布が濃密で、「山城国系」軒丸瓦といえるような広がりを持ち、山城独自の展開を示すことが指摘されている（文献17）。ここでも軒丸瓦の文様から、山城が独立性を維持し得た事実が考えられている。

（近江における藤原宮系・平城宮系瓦の分布） 近江で現在、藤原宮系・平城宮系軒丸瓦が確認されている遺跡数は、前段階の古代寺院に比べてその数は激減する。

現在藤原宮系軒丸瓦の出土地点は、先学が指摘しているように、琵琶湖岸や古代官道に近い交通の要地に集中している（文献18・19）（図3参照）。この中には藤原京系軒丸瓦を創建瓦に持つ寺院が多く含まれており、新規の寺院設立に伴う単発的な印象がぬぐえない。ただし、湖東式軒丸瓦など、独自の発展と展開を見せる例もあり、近江における白鳳期以降の軒丸瓦文様の展開は機会を改めて整理したい。

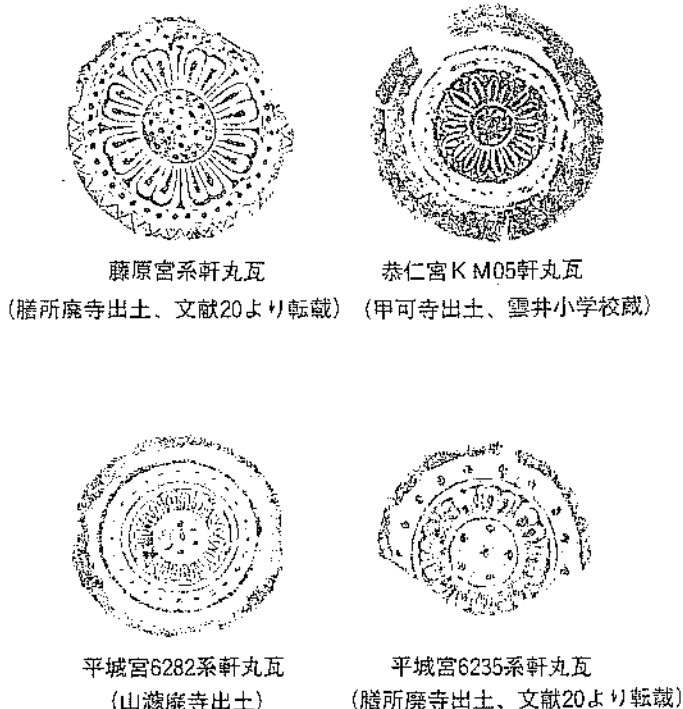
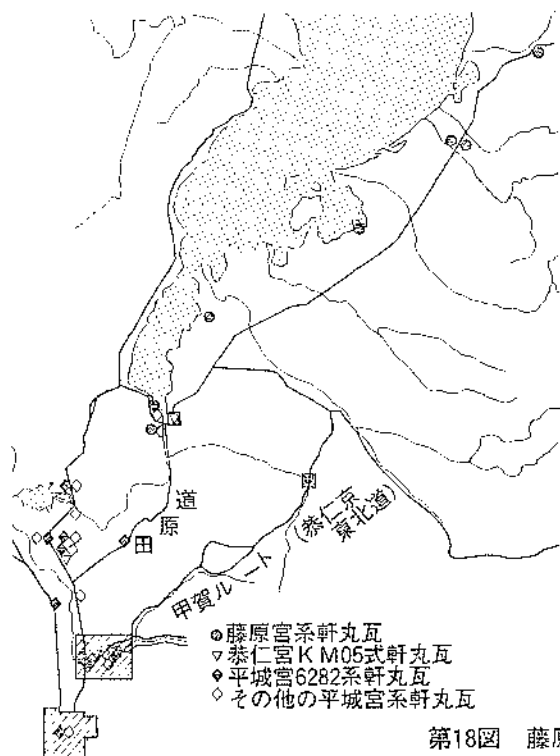
第二期の恭仁宮系の軒丸瓦の分布についても触れておかねばならないだろう。紫香楽宮¹¹³や近江国庁で確認されるのみで、後者は少量の出土しかみない。ここには恭仁京東北道を経由する甲賀ルート¹¹⁴を介した恭仁宮と紫香楽宮との強い関係を確認する事が出来る。この時期あえて近江の中心的地域である湖南地域を経ずに東国への道を開いた事の意味は無視できない。

近江における平城宮系軒丸瓦の分布は図3に示すとおりである。先に述べた第三段階において、国庁及び国分寺・国分尼寺に比定される大津市南部の遺跡群に集中してみられる。これらの遺跡群が集中する石山・瀬田地域は、田原道と東山道が接続する地点にあたっている。近江における平城宮系軒丸瓦の分布は、国庁、国分寺や国分尼寺といった公的性格の強い施設に限られている

ことが指摘されている（文献20）。また、第二段階では甲賀ルートが強調されるのに対して第三段階では再び田原道が重視されて来るものの、関連施設群は公的性格を強めながら、田上ではなく瀬田に展開していく。

6. まとめにかえて

石居廃寺と山瀧廃寺の性格を瓦を中心に整理してみた。いずれも資料数が限られた現状では予察の域を出るものではない。しかし、律令制の中で中央の政治的要因による交通路の変換が地域



第18図 藤原宮・平城宮系軒丸瓦分布図

(文献14をもとに作成。分布が集中する地域は一部省略した。)

に与えた影響の大きさを見る事が出来た。もはや地域内だけで完結するのではなく、中央との関りが地域の性格を決める時代になったとも言えよう。以上のように、東山道の整備や遷都といった国家的プロジェクトをめぐって田上と宇治田原という小地域の変質や、近江と山城の結び付きの微妙な変化を伺うことができたと思う。今後の資料の増加によって、両地域の関係が鮮明に浮かび上がってくるであろう。

参考文献・引用文献

1. 島田貞彦「近江国栗太郡石居発見の土塔」（『歴史と地理』第14巻第3号 1924）
2. 島田貞彦「近江国栗太郡石居廃寺に就いて」（『歴史と地理』第15巻第4号 1925）
3. 肥後和男「石居廃寺趾」（『滋賀県史蹟調査報告』第五冊 1933）
4. 高井悌三郎「近江石居廃寺跡踏査記」（『田上のあしあと』田上郷土資料館々報二、1973）
5. 林博通「石居廃寺」（小笠原好彦ほか『近江の古代寺院』近江の古代寺院刊行会 1989）
6. 大津市教育委員会委員会「新修大津市志」 1961
7. 京都府教育委員会「京都府遺跡地図」第五分冊 [第2版] 1985

8. 佐藤虎雄「山瀧廃寺」『京都史蹟』1-6 1930
9. 光島市太郎「山瀧廃寺発見の古瓦」『京都史蹟』1-7 1930
10. 佐藤虎雄「山瀧寺遺蹟」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』13 1932
11. 奈良国立博物館『飛鳥・白鳳の古瓦』1972
12. 高橋美久二「宇治田原町山瀧寺跡出土の古瓦」『京都考古』5 1974
13. 宇治田原町教育委員会『宇治田原町史』1970
14. 足利健亮『日本古代地理研究』大明堂 1985
15. 山城町教育委員会『京都府山城町埋蔵文化財調査報告書 第7集 史跡高麗寺跡』1989
16. 京都府教育委員会『恭仁宮跡発掘調査報告書 瓦編』1984
17. 京都府立山城郷土資料館『山城の古瓦』1983
18. 坪之内徹「畿内周辺地域の藤原宮式軒瓦」『考古学雑誌』第68巻 第1号 1982
19. 花谷浩「寺の瓦作りと宮の瓦作り」『考古学研究』第40巻 第2号 1993
20. 小笠原好彦ほか『近江の古代寺院』近江の古代寺院刊行会 1989
21. 宇治市教育委員会『宇治市文化財調査報告 第1冊 大鳳寺跡発掘調査報告』1987

註

- (1) 細川修平氏の御教示による
- (2) 田原道のルート推定に当たっては、文献14を基にした。
- (3) 石居廃寺出土資料は、大津市歴史博物館松浦俊和氏、田上鉾物博物館の特別な御好意により資料を実見する機会を得た。
- (4) この瓦の類例を見出す事が出来なかった。
- (5) 森遺跡（瓦窯）の範囲内を、瀬田ゴルフ場の特別な御好意により、分布調査をさせていただいた。その結果、登り窯跡は見出せなかった。
- (6) 田村博氏の特別な御好意により、資料を実見する機会を得た。
- (7) 宇治田原町教育委員会液部健氏の特別な御好意により、現存資料を実見する機会を得た。
- (8) 液部健氏の御教授による。
- (9) 開弁の表現に注目すれば、南滋賀廃寺出土資料に類似したものがある（文献20南滋賀廃寺参照）。これに後出すると思われる資料も屋中寺廃寺から出土している（文献20屋中寺廃寺参照）。いずれも外縁が輻線文で大きく前に張り出す事、瓦頭に製作時の技法に関連すると思われる痕跡が残る点が異なっている。しかし、瓦頭が薄く作られることや、丸瓦との接続方法と瓦頭裏面の調整に共通点が見られる。内区の印象も似通りのモチーフを持つ可能性も考えられる。なお、南滋賀廃寺例は搬入品と考えられており、製作地は明らかになっていない。以上の事については、松浦氏の御教示を受けたところが大きい。
- (10) 宇治田原町は丘陵が多く、水田が大きく展開する余地は見出しにくい。現在、茶生産が農業の中心となっており、ここで言う「開発」も水田開発を意味するものではなく、山林開発などを念頭においたものである。ただし、現在知られる遺跡の動向からは、本格的開発の時期としては第三段階を待たねばならない。
- (11) 8世紀は石山寺の造営、田上山作所の設置など、文献面から田上地域の「開発」が想定されている。しかし、考古資料からは現在のところその実態は明らかに出来ない。南郷・田上山製鉄遺跡群の存在は注目される。
- (12) 紫香楽宮（甲可寺）出土資料は、信楽町教育委員会鈴木良章氏の御助力と雲井小学校の皆様の特別な御好意で実見する機会を得た。

瓦観察表凡例

石居廃寺、森1号窯、山瀧廃寺出土資料の観察表は、以下のような共通の凡例によっている。

1. 凸面調整における数字は、下記の1～7の原体によるタタキがなされていることを示す（下図参照）。1は

表7 石居廃寺出土土瓦観察表

番号	種別	図版番号	凸面調整	凹面調整	断面調整	色調	焼成	備考
1	丸瓦			1 丁字な織ナデ	d	灰白色	やや不良	
2	丸瓦			1 凸部のみ布目織ケズリで消す	-	灰色	やや不良	
3	丸瓦			1 凸部のみ布目織ケズリで消す	-	灰色	やや不良	
4	丸瓦			1 凸部のみ布目織ナデで消す	-	灰白色	良	
5	丸瓦			1 凸部のみ布目織ナデで消す	-	灰白色	不良	
6	丸瓦			1 凸部のみ布目織ナデで消す	b	灰白色	不良	
7	丸瓦			2 布目残す	d	肌色	不良	
8	丸瓦			6 布目残す	-	灰色	良	
9	丸瓦			6 布目残す	-	淡褐色	不良	粘土板を重ねた痕跡あり
10	丸瓦			6 布目残す	a	赤褐色	良	田上磁物資料随蔵
11	丸瓦			7 後横ナデ擦り消し	-	青灰色	良	
12	丸瓦			7 後横ナデ擦り消し	c	青灰色	良	行基葺
13	丸瓦			縦にナデ消す	-	青灰色	良	布継目痕あり
14	丸瓦			縦にナデ消す	-	青灰色	良	
15	平瓦			3 不明	-	赤褐色	不良	
16	平瓦			3 布目残す	c	凸面灰褐色凹面肌色	不良	他の平瓦よりも薄い造り
17	平瓦			4 布目残すが、一部縦ナデ	-	灰黑色	良	
18	平瓦			6 凸部のみ布目織ナデで消す	-	灰白色	不良	
19	平瓦			6 布目残す	-	灰白色	良	
20	平瓦			6 布目残す	a	青灰色	良	田上磁物資料随蔵
21	平瓦			横ナデ	c	灰白色	不良	
22	平瓦			方向の一定しない1 丁字な織ナデ	-	灰白色	やや不良	
23	軒丸瓦			7 瓦頭裏面多方向の指ナデ、横方向にナデで接合	a	青灰色	良	田上磁物資料随蔵
24	軒丸瓦			瓦頭裏面多方向の指ナデ、横方向にナデで接合	a	赤褐色	良	田上磁物資料随蔵
25	軒丸瓦			2 瓦頭裏面多方向のナデ	-	暗青灰色	良	1+8?の中房部
26	軒丸瓦			1 瓦頭裏面丁字にケズリ、接合不明	-	灰白色	良	B類
27	軒丸瓦			3 -	-	灰白色	不良	1+8?の中房部
28	軒丸瓦			4 -	-	青灰色	良	子葉部破片
29	軒丸瓦?			-	-	灰色	良	金面剥離
30	軒平瓦			5 凸部のみ布目織ケズリで消す	-	灰白色	不良	2 重弧・A類、頸部欠損
31	軒平瓦			斜め方向のケズリ	cかd	灰色	良	3 重弧・A類、頸部
32	軒平瓦			縦方向のケズリ	-	灰色	良	
33	軒平瓦			丁字な織ナデ	-	青灰色	良	2 重弧・A類、頸部欠損
34	軒平瓦			丁字な織ナデ	c	灰白色	不良	3 重弧・A類、頸部
35	軒平瓦			布目残す	-	灰白色	不良	2 重弧・A類、頸部欠損
36	軒平瓦			6 後横ナデ消し	-	青灰色	良	4 重弧・A類
37	軒平瓦			横ナデ	-	灰白色	良	2 重弧・A類、頸部欠損
38	軒平瓦			横ナデ	-	青灰色	良	2 重弧・A類、頸部
39	軒平瓦			横ナデ	-	青灰色	不良	2 重弧・A類、頸部
40	軒平瓦			横ナデ	-	灰白色	良	3 重弧・A類、頸部
41	軒平瓦			横ナデ	c	青灰色	良	4 重弧・B類
42	軒平瓦			横ナデ	-	青灰色	良	4 重弧・A類
43	軒平瓦			指押さえ・横ナデ	b	灰黑色	不良	2 重弧・A類
44	軒平瓦			磨滅により不明	-	青灰色	良	4 重弧・A類

45 軒平瓦	磨滅により不明	磨滅により不明	暗灰色	良	2重弧・A類、頭部か？
46 軒平瓦	横ナデ	横ナデ	青灰色	良	2重弧・A類、頸部欠損 滋賀県教育委員会蔵

表8 森1号窯出土瓦観察表

番号	種別	図根番号	凸面調整	凹面調整	端部調整	色調	焼成	備考
1	丸瓦				—	青灰色	良	滋賀県教育委員会蔵
2	丸瓦				—	オリーブ褐色	良	凸面に自然釉
3	丸瓦			1 布目を密な縦ナデで消す	d	凹面肌色凸面赤褐色	不良	
4	丸瓦			1 布目残すか…一部縦ナデ擦り消す	—	オリーブ褐色	良	
5	丸瓦			3 布目残す	d	凹面肌色凸面赤褐色	良	
6	丸瓦			3 布目残す	c	肌色	不良	粘土充填痕？あり
7	丸瓦		7 後横ナデ擦り消し	布目残す	c	肌色	不良	摸骨痕あり
8	丸瓦		7 後横ナデ擦り消し	布目残す	d	肌色	やや不良	摸骨痕・布継目痕あり
9	丸瓦		7 後横ナデ擦り消し	布目残す	d	肌色	不良	摸骨痕・布継目痕あり
10	丸瓦		7 後横ナデ擦り消し	布目残す	c	凹面肌色凸面赤褐色	良	摸骨痕あり
11	丸瓦		7 後横ナデ擦り消し	布目残す	a	肌色	やや不良	摸骨痕・布継目痕あり
12	丸瓦		7 後横ナデ擦り消し	布目残すか…一部縦ナデ擦り消す	b	肌色	不良	
13	丸瓦		7 後荒く横ナデ擦り消し	布目残す	a	肌色	良	摸骨痕・布継目痕・粘土充填痕あり
14	丸瓦		7 後縦ナデ擦り消し	布目残す	d	凹面肌色凸面赤褐色	やや不良	摸骨痕・布継目痕あり
15	丸瓦		7 後縦ナデ擦り消し	布目残す	b	凹面肌色凸面暗褐色	不良	磨滅激しい
16	丸瓦		7 後縦ナデ擦り消し	布目残す	d	肌色	不良	摸骨痕あり
17	丸瓦		不明	布目残す	—	灰色	不良	磨滅激しい
18	平瓦			3 布目残す	—	肌色	不良	布継目あり
19	平瓦			3 布目残す	d	肌色	不良	
20	平瓦		7 後横ナデ擦り消し	布目を縦方向に擦り消す	d	肌色	不良	摸骨痕あり
21	平瓦		7 後横ナデ擦り消し	布目残す	e	赤褐色	良	凹面に成形時の線ナデ残る
22	平瓦		7 後荒く横ナデ擦り消し	横ナデで丁字に消す	a	赤褐色	良	
23	通瓦		6 後丁字にナデ擦り消し	丁字な多方向ナデ	c	凹面肌色凸面赤褐色	やや不良	2重弧・頭部欠損
24	軒丸瓦		8 外縁部荒い横ナデ、瓦頭裏面荒い多方向のナデ	丁字な多方向のナデ	—	肌色	不良	瓦頭部のみ 丸瓦接合痕あり
25	軒丸瓦		7 外縁部荒い横ナデ、瓦頭裏面荒い多方向のナデ	丁字な多方向のナデ	—	肌色	不良	瓦頭部のみ
26	軒平瓦		6	丁字な横ナデ	—	肌色	不良	頸部
27	軒平瓦		9 丁字な横ナデ	丁字な横ナデ	c	肌色	やや不良	4重弧・瓦頭部
28	軒平瓦		6 丁字な横ナデ	丁字な横ナデ	—	青灰色	良	4重弧・A類 滋賀県教育委員会蔵

番号	種別	図版番号	凸面調整	凹面調整	端部調整	色調	焼成	備考
1	丸瓦?			6 布目残す	-	青灰色	良	
2	平瓦		3 ? が四つ配される	-	-	-	-	写真残る
3	軒丸瓦	10	-	-	-	-	-	川原寺式 文献13 写真・拓影残る
4	軒丸瓦	13	-	-	-	-	-	新羅系 文献10・11 写真・拓影残る
5	軒丸瓦	11	-	-	-	-	-	平城宮6282系 文献10 拓影残る
6	軒丸瓦	12	-	-	-	-	-	平城宮6282系 文献10 拓影残る
7	軒丸瓦	14	瓦頭裏面は丁寧なケズリ、丸瓦凹面布目残す		-	表面黒色内部灰色	不良	平城宮6282系 文献10
8	軒平瓦	15	横ナデ	横ナデ	-	青灰色	良	4重弧・頸部下面に6条の突帯
9	軒平瓦		-	-	-	-	-	3重弧 文献9

表9 山瀧廃寺出土瓦観察表

3mm・7本単位の平行タタキ、2は一辺5mmの正格子に近い斜格子タタキ、3は一辺5mmの斜格子タタキ、4は一辺9mmの菱形を呈する斜格子タタキ、5は幅約3mmの荒縄タタキ、6は幅約2mmの縄タタキ、7は擦り消されているが幅約1mmの縄タタキである。

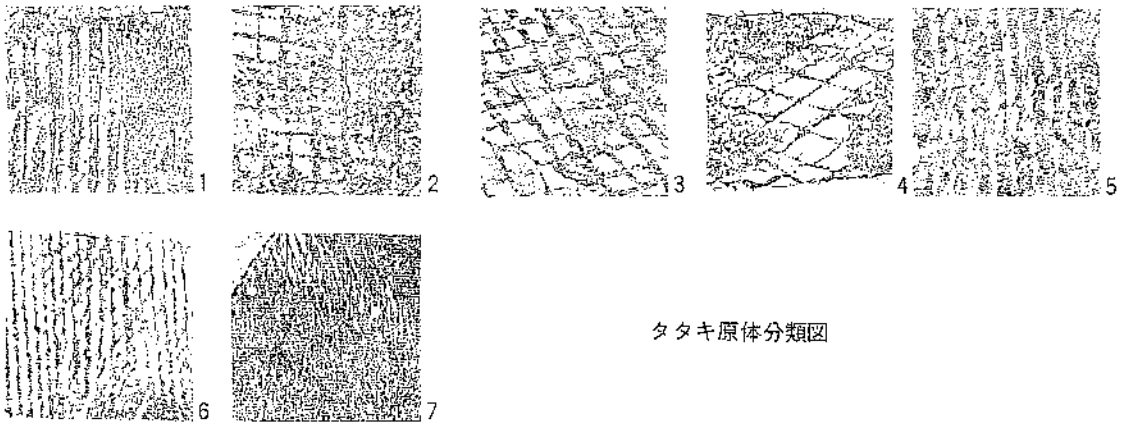
2. 凹面に残る布目は、いずれも1cmあたり縦7-8、横6-7であった。凸面のケズリとは、摸骨による痕跡の一番張り出した部分を示す。

3. 端部調整は、次のとおりである。(下図参照)

a 側面にケズリを施さないもの、b 外面のみ一度ケズリを施すもの、c 内外面に一度ずつケズリを施すもの、d 内面に一度、外面に二度のケズリを施すもの、- 欠損などにより不明なもの

4. 石居廃寺出土資料は、非常に小さな破片が多いが、資料の持つアールから丸・平瓦を区別した。

5. 特にことわりのない場合は、石居廃寺出土資料は大津市立歴史博物館が、森瓦窯出土資料は大津市上田上在住田村博氏が、山瀧廃寺出土資料は宇治田原町教育委員会がそれぞれ保管している。



タタキ原体分類図



端部調整模式図

第19図

編 集 後 記

この冬は、久しぶりに雪の多い年となり、外での調査では寒さに堪える日々を過ごされたことと思います。今年には当協会設立25周年にあたり、日頃の調査や普及活動に加え、安土城考古博物館で、企画展示『いにしへの渡りびと—近江の渡来文化—』や、それと関連したシンポジウムを実施してまいりました。本紀要も25周年ということで、例年にくらべて多くの論考が集まりました。つきましては、多くの方からのご叱正とご指導を賜れば幸いです。 平成8年3月

平成8年3月

紀 要 第 9 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775)48-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社
大津市札の辻4-20
Tel(0775)23-2580 Fax(0775)24-6668